

「狂女」に魅せられた日系少女たち

——ヒサエ・ヤマモト「ミス・ササガワラ伝説」とワカコ・ヤマウチ「そして心は踊る」に見るクィアな共振

古川 拓磨*

本稿は、日系アメリカ人作家ヒサエ・ヤマモトの短編小説「ミス・ササガワラ伝説」(1950)とワカコ・ヤマウチの戯曲「そして心は踊る」(1977)を対象に、「狂女」と呼ばれる日系女性と彼女たちに惹かれる二世少女の関係性を、クィア理論の観点から比較分析する。両作品では、共同体規範から逸脱した女性たちが「狂女」の烙印を押される一方、少女たちは彼女たちに憧憬や共感を抱く。本稿は、アドリエンヌ・リッチの「レズビアン連続体」およびジュディス・バトラーの「メランコリーのジェンダー」概念を援用し、少女たちの未分化な感情が異性愛規範によって抑圧されつつ主体形成に組み込まれていく過程を読み解く。さらに、「狂女」表象を単なる抑圧の結果としてではなく、日系アメリカ人女性同士のクィアな情動や連帯が継承される契機として再定位する。

キーワード：日系アメリカ人文学、ヒサエ・ヤマモト、ワカコ・ヤマウチ、レズビアン連続体、メランコリーのジェンダー

1. はじめに

ヒサエ・ヤマモト (Hisaye Yamamoto, 1921-2011) とワカコ・ヤマウチ (Wakako Yamauchi, 1924-2018) は、ともに農業を営む一世の両親の下、カリフォルニアに誕生した日系アメリカ人二世の作家である。第二次世界大戦中はアリゾナ州ポストンの日系人収容所に収監され、そこで二人は日系新聞 *Poston Chronicle* を発行するなどして親交を深め、生涯に渡る文学上の盟友関係を育んできたことは周知の事実である¹。ドロシー・リツコ・マクドナルド (Dorothy Ritsuko McDonald) とキャサリン・ニューマン (Katharine Newman) が “Both [Yamamoto and Yamauchi's works] show the deterioration of the family, the changing role of women, the bleakness of farm life, the transformation of Japanese traditions into Japanese-American culture.” (McDonald and Newman 1980: 22) と指摘する通り、二人の作品には共通項が認

められる。ヤマモトの短編「ハイヒール——回想」 (“The High-Heeled Shoes, A Memoir” 1948) にはワカコという名のキャラクターが登場し、またヤマウチもヤマモトの創作からの影響を認めている。日系コミュニティを、外部との交流を交えつつ批判的精神を伴って描くヤマモト、日系の伝統や文化を重視しコミュニティの内側からの視線で描くヤマウチと、スタンスに違いはあるものの、両者はアジア系アメリカ文学研究において比較分析されることもしばしばである²。

本稿ではヤマモトの短編小説「ミス・ササガワラ伝説」 (“The Legend of Miss Sasagawara” 1950) とヤマウチの「そして心は踊る」 (“And the Soul Shall Dance” 短編 1966, 戯曲 1977) を取り上げ、検討する。前者は第二次世界大戦中の強制収容所、後者は戦前の日系農園とそれぞれの設定舞台や時代は異なるものの、二世の少女の語りの中に「狂女」と揶揄される人物が登場し、語り手たちを惹き

* 大手前大学講師

つける。サンドラ・ギルバート (Sandra Gilbert) とスーザン・グーバー (Susan Gubar) の著書 *The Madwoman in the Attic* (1979) は、19世紀の英文学 (シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』やジェイン・オースティン、ジョージ・エリオットらの作品) における女性人物が男性中心主義の社会的抑圧によって比喩的にも字義通りにも「屋根裏」へと追いやられたり発狂したりする過程を分析する。この「屋根裏の狂女」像がアングロアメリカ・フェミニスト文学批評の構築においても重要であるとするソウリン・ワン (Sau-ling C. Wong) とジェフリー・サンタアナ (Jeffrey J. Santa Ana) は “...Asian American women's writing has its share of madwomen, whose insanity may be read as a product of society's repressions.” (Wong and Santa Ana 1999: 203) と述べながら、本2作品を代表的な例として挙げている。本論で取り上げる女性たちもそれぞれが抱える個人的苦悩と、日系アメリカ人社会が共同体として抱える困難の中で「狂女」として描かれるに至った、というのが定説となっている³。

スタン・ヨギ (Stan Yogi) は、親世代を二世の視点から描く両作家の語りを次のように特徴付ける。

[R]eaders discover the Issei women's defiance in much the same way as do the daughters who observe their mothers: through indirect actions and perceptions that often defy definitive explication. These narratives... subtly suggest, through the reactions of Nisei daughters to their mothers, the transformations of the very standards the mothers violate. (Yogi 1992: 132)

この指摘が示すように、少女たちの視点は成人女性の人生や彼女たちの示す抵抗や逸脱を即座に理解するものではなく、そういった理解不可能性や違和感を引き受ける位置にある。本論で着目したのは、これら2作品の日系人コミュニティにおいて「狂女」と見なされる大人の女性に少女たちが強く惹かれる様が、単なる憧れとも恋愛感情と

も断定し難い色彩を帯びている点である。これら少女たちは自身の性的欲望の認識には至っていないものの、その「クィア」な感性が、社会規範を逸脱し夢や目標を希求する芸術家の感性と共振している点は重要に思われる。少女たちは音楽や詩に関心があり、「狂女」たちも芸術家としての経歴や嗜みを備えている⁴。そして少女たちの憧憬を受ける成人女性たちに押される「狂女」の烙印は、彼女らの身体やセクシュアリティが異性愛的枠組みの中で男性から管理、侵害されることに強く抵抗しているためである。

女性間の関係性を論じる際、政治的な共闘・支援・相互扶助を意図する「シスター・フッド (Sisterhood、女性同士の連帯)」の概念は重要であろう。しかし本稿ではアドリエンヌ・リッチ (Adrienne Rich) の定義する「強制的異性愛」(compulsory heterosexuality)、「レズビアン連続体」(lesbian continuum) とジュディス・バトラー (Judith Butler) の論じる「メランコリーのジェンダー」(melancholy gender) の概念に依拠し、ヤマモトの「ミス・ササガワラ伝説」およびヤマウチの戯曲版「そして心は踊る」を分析する。本稿にてこれらの理論枠を採用するのは、扱う2作品に見られる女性同士の関係性が明らかに政治的連帯の枠を超えたところで規範に回収されない情動や欲望、異性愛的可視性の外部を提示するからである。

以降の各節ではまず「狂女」として揶揄される「ミス・ササガワラ伝説」のマリ (Mari)、「そして心は踊る」のエミコ (Emiko) を「狂女」ならしめる姿に着目し、彼女らを狂気へと追いやっていく文化・社会的構造の問題を読み解くことで狂気／理性の境界を再考する。そのうえで、マリに寄せる語り手キク (Kiku) の関心や羨望、エミコに見せるマサコ (Masako) の好奇心、といったそれぞれのクィアな感情がいかにして芽生え、(無自覚のうちに) 断念させられるのかを明らかにしつつ、両作品における女性同士の関係性のあわいを読み解いていく。これまでも、「狂女」は家父長制や民族的抑圧の帰結として繰り返し論じられてきた。しかし、本稿では、「狂女」像そのものの再評価に

とどまらず、彼女たちに眼差しを向ける少女——すなわち語り手であるキクやマサコ——との関係性に分析の焦点を置く。周縁化された成人女性がいかに「狂女」と名指されるかを問うだけでなく、そうした女性に惹きつけられる少女たちの未分化で名指すことのできない情動や感性が、どのように形成され、またどのように抑圧されていくのかを検討することで、本稿は「狂女」表象を次世代の主体形成と結びつけて捉え直すことを試みる。

II. 強制収容所の「狂女」 ——監視・抵抗・ジェンダー規範

第二次世界大戦中の日系アメリカ人の強制収容所を舞台とする「ミス・ササガワラ伝説」の語り手であるキクは、作者ヤマモトが実際に収容されていた当時の年頃を反映させた20代前半の女性として設定されている。したがって少女という年頃は過ぎているのだが、若く経験も乏しい日系女性という点では、次節で見るマサコとも共通する。当時の女性としての平凡な夢を思い描きながら収容所で過ごすキクの前に登場するミス・ササガワラ (Miss Sasagawara) ことマリは、以下に見る周囲の語るまことしやかな振る舞いにもまして、国中を巡るダンサーとしての過去を有している点でも魅力的に映るようだ。元山千歳はマリのセクシュアリティについて、

..... キャンプ生活のなかで、監視される性であった。身近には、解脱を目指すブディズムの僧である父によって。プライヴァシーの無い毎日を過ごすバラック住人の好奇の視線によって。キャンプ全域を監視する戦時転住局によって、ミス・ササガワラは見られつけていた。(元山 2001: 286)

と言及し、監視対象の性としてスティグマ化されていたとする。多くの日系人が暮らしていた農村地帯と比較し、圧倒的に人口密度の高い収容所で他者の視線を避けることの困難は想像に容易い⁵。

これらマリを監視するものは、彼女を性や日系文化の規範から逸脱することを許さない拘束力として機能し、彼女の精神に不調をきたす。けれども複数の研究が指摘するように、マリに関する奇妙な噂は、バラックの住人たちの間で交わされたものを聞いた友人エルシーがキクに伝えたものであり、先入観を持った幾人もの隣人たちを介して伝達されるこの噂は信憑性に欠けることが示唆されている⁶。

キク自身は、そのような噂を拒絶もしなければ鵜呑みのにもせず、ある程度意識的な実体験に基づく観察や交流を図っている。キクがマリを観察する動機は、次の引用にあるようなマリの溢れんばかりの成人女性の魅力に対する憧れが第一に読み取れる。

Her daily costume, brief and fitting closely to her trifling waist, generously billowing below, and bringing together arrestingly rich colors like mustard yellow and forest green, appeared to have been cut from a coarse-textured homespun; her shining hair was so long it wound twice about her head to form a coronet; her face was delicate and pale, with a fine nose, pouting bright mouth, and glittering eyes; and her measured walk said, "Look, I'm walking!" as though walking were not a common but a rather special thing to be doing. (Yamamoto [1950] 2001: 20)

およそ収容所らしくないマリの服装や振る舞いは、バレリーナとしての経歴に由来し、表現者としての意図的な身体の活用であり、キクはその点を賞賛している。しかし収容所の共同体は、マリのこのような派手な姿を美しさとしてではなく、性的なふしだらさと否定的に受け止め、監視対象の性という先のスティグマを強化する。彼女が少年たちのスポーツに興じる様子を指を咥えて眺めていたとか、眠っている少年ジョー・ヨシナガ (Joe Yoshinaga) の枕元でその寝顔を見つめていた

とかいう「噂」が流布し、そのグロテスクなイメージを補強していく。同居する僧侶の父親は、彼女の振る舞いに関する隣人からの抗議に対しても無関心であり、娘を擁護しようとはしない。

また、マリは同じバラックに住む男性がホースを携えて掃除の手伝いを申し出ると、水を浴びせて拒んだり、体調不良で入院した際には医師からの触診を嫌がって逃亡したりもする。相手の許可を待たずにホースを持ってマリの部屋に入り込む男性の行為は、女性の私的空間と身体的自律への侵入を伴う点で、性的暴力を想起させ、医師の「触診(“pawing”)」(Yamamoto [1950] 2001: 26) は社会力学の差にかこつけた女性身体の物象化を示唆する。彼女のこれらの行動は、彼女の身体に侵入しようとする男性への抵抗を明確に示しているエピソードである。

収容所内で流布されるこれらのエピソードは、必ずしも根拠薄弱というわけではなく、マリはある程度これら型破りな行動を実際に起こしたのであろう。とすれば、彼女の行動からは、自身に不利な噂を巧みに利用し、日系共同体に対して斜に構えた態度で「狂女」像を演じていたトリック・スター性が浮かび上がってくる。チャンが指摘するように、マリは三重の抑圧を受けていた。それらはすなわち、「父から受ける娘としての抑圧、コミュニティから受ける未婚女性としての抑圧、迫害された人々の一員として政府から受ける抑圧」であり、マリの行動はそれらから「逃避」する術としての「狂気」というわけである (Cheung 1993=2015: 114)。そうすると、彼女が自身の身体への侵入を拒み、自身のセクシュアリティを公然と表現する姿は、逸脱者の役柄を演じることで共同体規範を攪乱するパフォーマンスな抵抗と捉えられる。また自身を「見られる」存在としてあえて過剰化させることで、周囲の視線を露呈させもする。マリは構造的な抑圧の只中に置かれながらも、他者の解釈欲望を操り、単なる被害者像への回収を拒否するのである。

一方、大学で心理学を学んだ⁷らしいキクは、マリに関する噂に次のような解釈を施す。

... I, who had so newly had some contact with the recorded explorations into the virgin territory of the human mind, sagely explained that Miss Sasagawara had no doubt looked upon Joe Yoshinaga as the image of either the lost lover or the lost son. But my words made me uneasy by their glibness, and I began to wonder seriously about Miss Sasagawara for the first time. (Yamamoto [1950] 2001: 32)

彼女の解釈はマリに対して同情的であるだけでなく、彼女の内面をもっと深く知りたいという願望としても読める。事実、キクはマリとの限られた交流の中で、二人きりになる機会を確保しそれを楽しんでいる。ある晩、キクは浴場にてマリと二人きりで笑顔を交わしながら音楽に関する個人的な会話することに成功する。これは二人が会話らしい会話を交わした唯一の機会であり、彼女の思い出深いエピソードとして挿入されている。浴場という裸体で、かつ密室空間での親密なやりとりには、次節にて見る「そして心は踊る」が入浴場面から展開していく点と類似し、センシュアルな気配が匂わされている。とはいえ、「自分の軽々しい言葉に不安を覚え」たとあるように、キクはマリの分析を試みることによって、男女二元論的かつ異性愛を前提とする既存の精神分析では説明しがたい未開の領域がある点、それが自身の内にもある可能性を察知したことも示している。

この二人の関係性は、次の通りリッチの提唱する「レズビアン連続体」のレンズを通すことでより理解が深まるように思われる。

レズビアン連続体という用語には、女への自己同定の経験の大きなひろがり——一人一人の女の生活をつうじ、歴史全体をつらぬくひろがりをふくみこも意味がこめてあって、たんに女が他の女との生殖器的経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望をいだくという事実だけをさしているのではない。それをひろげて、女同士のもっと多くのかたちの一

次的な強い結びつきを包みこんで、ゆたかな内面生活の共有、男の専制に対抗する絆、実践的で政治的な支持の与えあいを包摂してみよう。……そうすれば、おおかたが臨床医学的で限定された定義のおかげで、把握できないところに置かれてきた女の歴史と心理の息づかいに、私たちは触れはじめるようになる。(Rich 1986=2025: 85-6 強調原文)

このリッチの指摘は、性的な行為や関係性の有無を問わず⁸、女性同士の絆をより大きな視野で捉えることを主唱するものである。リッチは多くの女性が男性の既得権益を維持する異性愛制度(=結婚)の中にあっても、同性に対する様々な欲望を放棄しているわけではなく「二重生活」⁹(Rich 1986=2025: 96)を営んでいると指摘した。女性同士の関係性に広範な情動的、精神的、共同行為的な連帯を見出すことで、異性愛を前提とする文化において女性間の絆が不可視化される構造を照らし出し、抑圧された潜在的な感情の領域を回復させることを試みたのである。

本節にて検討している2人の女性間において実際の交流は極めて限定的であり、同性愛的欲望を明確に自覚したり、性的アイデンティティについて語ったりもしない。けれどもこのリッチの視座を通すことで、逸脱者とされるマリと彼女に魅せられるキクの関係性に、異性愛中心主義や過度に性化された観点からはこぼれ落ちかねない曖昧で多層的な様態を見出すことが可能になる。それはリッチが問題視する「男の肉体的、経済的、情動的接近権を確保する手段としての、女への異性愛の強制」(Rich 1986=2025: 83)に忌避感を抱く女性の姿を本作品が提示しているからである。

キクは、周囲を圧倒するマリの煌びやかで派手な格好や奇抜な行動に魅了され、彼女にさらに接近したいという衝動を覚える。しかし同時に良い仕事を得、自分を愛し続けてくれるハンサムな男を夫に持つという既存の通俗的な夢も抱えている。彼女自身の欲望と共同体規範の価値観との間に揺れ動く、矛盾をはらんだ感情の混合はリッチ

の言う連続体の一端をなしていると言えよう。したがって作品の終盤に紹介されるマリの告白詩は、キクにとって衝撃を伴って発見される¹⁰。その詩は、父親が社会からの尊敬を集めつつも仏教の修行に励むがあまり、娘を全く顧みず常軌を逸した状態へと追いやってしまったと、アイロニックに語るのである。

This man was certainly noble, the poet wrote, this man was beyond censure. The world was doubtless enriched by his presence. But say that someone else, someone sensitive, someone admiring, someone who had not achieved this sublime condition and who did not wish to, were somehow called to companion such a man. Was it not likely that the saint, blissfully bent on cleansing from already radiant soul the last imperceptible blemishes (for, being perfect, would he not humbly suspect his own flawlessness?) would be deaf and blind to the human passions rising, subsiding, and again rising, perhaps in anguished silence, within the selfsame room? The poet could not speak for others, of course; she could only speak for herself. But she would describe this man's devotion as a sort of madness, the monstrous sort which, pure of itself, might possibly bring troublous, scented scenes to recur in the other's sleep. (Yamamoto [1950] 2001: 33)

詩人マリは、宗教的崇高さと家父長制イデオロギーに裏打ちされた父親の自由こそが、彼女を拘束し抑圧した「狂気」であると、彼女とその父親それぞれの評判を転換してみせる¹¹。作中でマリに関する情報のほとんどが噂や憶測に依存している一方、この詩だけは外部から付与された「狂気」という言説を打ち破るマリ自身の声なのである。作品の構造を転換するこの詩は難解で、キクがそれを十分に理解し得たかどうかには疑問が残る。それは彼女もまた共同体的規範の語彙を通し

てしか世界を読み取れない立ち位置にいるからである。その理解不可能性がゆえ、この詩はキクを動揺させつつも自身の内なる逸脱的感情に触れさせる契機となるのである。そして新井透はここに、強制収容所に「父娘が押し込められるというアメリカ政府の非人道的行為こそまさに『戦争ヒステリー』という狂気」である点を付け加える(新井2004: 211)。国家、社会、そして家族からも否定されたマリの内面について、その詩を読むことで部分的にはあれ共有し得たキクは、唯一彼女だけが共感や憐憫を伴って見つめていたこの女性へ驚嘆の気持ちを一層強くしたのではないだろうか¹²。

ここでもう一つ援用したいのはバトラーの言う「メランコリーのジェンダー」の概念である。フロイト(Sigmund Freud)が「喪とメランコリー」(1917=2018)で提示した「同一化」(identification)において、子は失われた対象(親)に同一化することで超自我を形成し、性別役割や欲望の方向性が安定化するとされる。フロイトを踏襲したラカン(Jacques Lacan)は、主体は鏡像や他者への同一化を通して形成されるが、その自己は常に他者と言語的・社会的秩序(象徴界、すなわち「父の名」に表されるような家父長的秩序)に依存した分裂的で不完全な存在であると論じた。バトラーは『ジェンダー・トラブル』(Gender Trouble, 1990=2018)において、これらを規範的異性愛(heteronormativity)を前提としたモデルであるとみなし、同一化は固定的な性やジェンダーを生むわけではなく、むしろ反復的な生成過程であると批判的に再解釈を試みた。バトラーが同著にて論じるジェンダーの「行為遂行性」(performativity)の背景には、ジェンダーを禁止された欲望の代償的な同一化であるとする理解がある。すなわち、まず同性への欲望を禁じられた主体の同性愛的欲望が失われた対象として扱われる。禁圧が故に喪に服することが許されないその欲望はメランコリーの自我へ沈殿し、結果として主体は失われた同性対象と同一化することで「男らしさ」や「女らしさ」といったジェンダー規範を体現するようにな

る、というもので、これが「メランコリーのジェンダー」と呼ばれる。

キクは実際、“I hoped my body would be as smooth and spare and well-turned when I was thirty-nine.” (Yamamoto [1950] 2001: 22) と述べているように、身体的にもマリのようになりたいという同一化の願望を示唆している。彼女がマリの詩を読んだのち、“It was ... erratically brilliant and, though the first readings, tantalizingly obscure” (Yamamoto [1950] 2001: 32) と述べるように強い興奮と不安に揺れ動く様は、単なる理解不能の恐怖ではなく、自らのうちに生じつつある規範逸脱的な感情への驚き・否認の混合状態であると捉えることができる。すなわち、彼女の経験する不安は、抑圧された欲望の存在そのものへのパニックであり、彼女の自我同一性を揺るがし、キアな余白を開くきっかけとなるのである。作者ヤマモトはインタビューにて、自身の描く人物たちについて次の引用のように語る。

I'm what you call a humorist manqué. Every time I started a story I would try to be funny, and it would always end up kind of tragic sometimes, so I don't know what happens between my intention and the outcome. Those characters take over and go down to destruction. (Cheung 2000: 347)

ヤマモト作品に登場する女性人物たちは、往々にして何かしら閉塞感を味わっており、混乱や曖昧な感情を伴って登場する。それは、本節で検討した「ミス・ササガワラ伝説」においても同様で、「狂女」とされるマリだけでなく、語り手キクも考慮されなければならない。チャンが指摘するように、キクの快活な語りが故に読者は、物語の舞台である「収容所生活を全く『正常』だと考えるように」(Cheung 1993=2015: 105)と誘導されているのである。政府、文化規範、コミュニティなどからの圧により、‘mad’(狂っている)になっていくマリの印象が強烈であるが、本作品は狂気／理

性の図と地を覆してみせる。閉塞的な環境下の語り手キクもまた、本心はマリに対して‘mad’（のぼせ上がっている、夢中になる）でありながらそのクィアな欲望を無意識に抑えざるを得ない状況下にあった。「ミス・ササガワラ伝説」は、国家や文化社会規範からの否認により翻弄されながらも、自分の生に忠実に生きようとした女性たちの姿と、その連続体の可能性を呈していると言える。

III. 農場に踊る「魂」 ——日系女性の情動的結びつき

ヤマモト、ヤマウチの両者の作品に通底する特徴として「娘の語りを通して夫婦間の齟齬や果たせない母親の願望が明らかにされる中で、母親のセクシュアリティが押し量られている」（桧原美恵 1997: 245）ことが指摘されているが、本稿で扱う2作品にもおいても、娘たちが母親に近い世代の女性たちのセクシュアリティに思い巡らす場面が散見される。戦前の日系人の農場コミュニティの2家族を巡る物語「そして心は踊る」は、主人公マサコが隣人のミセス・オカ（Mrs. Oka）ことエミコの観察と交流を通して物語するという形式が取られている。前島志保は本作品を「一世の体験的遺産を二世が観察と想像によって物語化して受け継ぐという体を成している」という点で、「究極の『娘の母語り』」であると位置付けている（前島 2001: 102）。本節では人物描写や背景設定がより深く掘り下げられている戯曲版を中心に据えつつ、短編版も補完的に用いて、孤独なマサコがエミコの異様な立ち居振る舞いに惹かれていく過程を分析する。

ムラタ（Murata）家とオカ（Oka）家という2家族¹³のみが中心に登場する本作品は、先のヤマモト作品と比較して、女性同士の交流の中に絆を育む姿や、時に男性に立ち向かう姿をより多く提示している。母親のハナ（Hana）は、娘世代の女性に慎み深さや忍耐の重要性を説くことで（一見すると家父長制の温存や女性の従属性強化に寄与しかねないように映るけれども）、移民一世の体験

に基づく異国でのサバイバル戦略を継承しようとする。またハナは、キヨコ（オカ家が日本でもうけた娘）の眼前で妻に暴力を振るうミスター・オカ（Mr. Oka）に対しても、はるばる異国アメリカまでやってきた娘のことを考えて振る舞うようにと窘めもする。少女から大人への過渡期にあるキヨコも、ハナを頼ったり、マサコとの友情の兆しを見せたりするなど、これら4人の2世代の女性たちは、ヨギも指摘するように、単なる母娘関係や隣人関係を越えた「複雑に絡み合った（“interwoven”）」（Yogi 1992: 134）関係性を提示している。

移民としての厳しい生活の下、共同体として互いに助け合う日系人の姿が随所に見られるのだが、その外部に位置付けられるのが、エミコと彼女への関心を示すマサコである。2人のセクシュアリティは他の大人たちの無視、糾弾、代弁、はぐらかしによって否定・抑圧されている。マサコがエミコへの関心を口にする则ち母親は話題を変えて焦点をずらす。エミコの過去の恋愛体験は夫によって“*saru shibai*”（Yamauchi [1977] 1994: 180）と揶揄される。また夫たちは互いに、妻を家畜の馬に喩えたり、妻にへつらう男は哀れだと述べたりして、家父長としての自らの権威を維持し女性たちを下位に位置付けるべく認識を共有し合う。

主人公マサコは一世の両親の下、カリフォルニア州インペリアルバレーに暮らしていた農家の娘である。マサコが両親との関係において孤独を感じている点には注目すべきである。ある夏、彼女はうっかり風呂場でボヤを起こしてしまい、不用心を何度も母ハナから責められ、惨めに感じている。元来寡黙な父親はさておき、母親はマサコに叱責や戒めの言葉を多く投げかけ、窮屈な思いを深めさせる。日本からオカ家の娘キヨコが渡米してくると、ハナは娘マサコ以上に彼女と急速に関係を深め、マサコの疎外感は一層深まる。毎晩風呂を借りるため隣人オカ家の世話になることで「狂女」と揶揄されるエミコとの接点が生まれるのだが、それがより一層身体への意識が集まる瞬間である入浴時である点は示唆に富む。毎晩のオ

カ家通いを通して、マサコはエミコを取り巻くどこか奇妙な点に気づいていくのである。

マサコはエミコがレコードから流れる日本の歌を耳にして目に涙を溜める姿や、お茶の一杯も振る舞わないばかりか会話にも加わず、時には姿さえ見せないこともあることを、はじめ彼女が“insane”なのではないかと訝しがり、彼女の飲酒の習慣を“unusual”（どちらもYamauchi [1966] 1994: 20）であると評価する。とはいえ、マサコは彼女の知るさまざまな“unusual”な日系女性を列挙してもおり（例えば、元芸者、好戦的なクリスリャン・サイエンス信者、オカルト信者の助産師）、エミコがとりわけ奇異な存在である点を強調するよりもむしろ、彼女の何らかの振る舞いが彼女の魅力として機能していることを仄めかす。換言すれば、エミコの姿は正気でないという否定的な印象以上に、他の女性とは違っている何かが、マサコにとって唯一無二な存在たらしめ、それが一層好奇心をくすぐっているのである。以下、エミコがマサコの関心を引く要素を検討していく。

マサコはエミコの飲酒や喫煙の嗜好を「男性の領域への立ち入り（“a step into the realm of men” Yamauchi [1966] 1994: 21）」と評するものの、“In spite of her masculine habits, Mrs. Oka was never less than a woman. She was no lady in the area of social amenities, but the feminine in her was innate and never left her.”（Yamauchi [1966] 1994: 21）と語るあたりからも同性の大人の有する魅力を認めている。しかしマサコがどんな大人の女性に対しても魅力を感じているわけではないことは、先述の“unusual”な女性たちのことや、ミスター・オカの前妻（エミコの姉である）との間に生まれた娘キヨコが渡米してきた際に、友人ができると期待していたにもかかわらず実際には想像以上に成熟した姿を目にして失望を覚えている姿からも読み取れる。エミコの姿を単に奇異なものとみなすのではなく、他の女性とは異なる在り方を観察するマサコの関心は、異性愛中心社会の外部に潜在する女性同士の情動的結び付きの萌芽のように読み取れる。

夫や社会から狂女、不適格な妻といった烙印を押され、非社会的で孤独を深めるエミコが、マサコとは会話をするシーンは興味深い。エミコはマサコが持参したレコードから流れる「そして心は踊る」を耳にし、涙を流して踊りを舞う。この曲をきっかけに二人だけの会話が始まり、エミコは誰にも言わない秘密について、マサコに話す寸前にまで至る。次の引用は、両親やミスター・オカから大人たちの交流に居心地の悪さを感じ家の外に出たマサコが、そこで出くわすエミコと交わす会話である。

EMIKO [softly]: ... Masa-chan, do you have a boyfriend?

MASAKO: I don't like boys. They don't like me.

EMIKO: Oh, that will change. You will change. I was like that too.

MASAKO: Besides, there's none around here ... Japanese boys. There are some at school, but they don't like girls.

...

EMIKO: You'll have a boyfriend one day.

MASAKO: Not me.

EMIKO: You'll fall in love one day. Someone will make the inside of you light up, and you'll know you're in love. Your life will change ... grow beautiful. It's good, Masa-chan. And this feeling you'll remember the rest of your life ... will come back to you ... haunt you ... keep you alive ... five, ten years ... no matter what happens. Keep you alive. (Yamauchi [1977] 1994: 186-7)

エミコにはかつて愛し合う男性が存在したが、その出自が思わしくないため離縁させられたあげく、その後死亡した姉の夫と結婚させられ渡米したという経緯がある。愛のない結婚生活の下、いつの日か日本に戻りかつての恋人と再会するという希望だけが彼女の生命線となっているのだ。加えて瀧田佳子は、エミコの渡米以前の文化的生活

や体験にも着目している。すなわち、彼女が様々な習い事を受けていたことや、1920年代の東京に暮らしながら当時盛んに輸入された西洋文化を一身に味わっていた、いわゆる現代的な女性「モガ」である点だ（瀧田 2002: 37）。欧米風の最先端の都会暮らしやそこでの甘い恋愛体験から一変し、アメリカの農場で互いに愛のない夫と生きねばならないギャップや閉塞感は、彼女の孤独をより濃厚にしてしまったのである。そのような経験を踏まえ、エミコは恋愛の甘美さを伝えようとするのだが、マサコは男の子を好きでもないし、彼らも自分を好いてくれることはない、と悲観的とも冷笑的とも取れる反応を示す。若干12歳のマサコは経験も乏しく、異国での厳しい暮らしに奔走する両親に恋愛や結婚の理想像を見出してもいない。しかしエミコに対する持続的な関心や、「自分にボーイフレンドができることはない」というようなマサコの言葉は、彼女の異性愛への違和感をかすかに示唆していると考えられる。既存の社会規範に回収されることを拒み周縁化されるエミコとマサコの姿は、強制的異性愛の装置——家父長的婚姻、妻役割、移民共同体の規範——のひび割れから漏れ出る女性同士の親和性を露呈していよう。

またある春の夜のこと、マサコが一人荒野を歩いていると、作品そのものと同じタイトルである楽曲「そして心は踊る」のセンシュアルな歌詞を口ずさむエミコの声が聞こえてくる。セージの枝を手に持ち、ミステリアスに笑いながら舞うエミコの姿は奇怪にも映る。その姿に居心地の悪さを感じながらもマサコは見ることをやめず、見られていることに気づいたエミコは、想像上の花をマサコに向かって散らしながら去っていく。二人の交流は、世代や事情の違いはあれども互いを意識せずにはいられない関係性の萌芽を見せている。

許されざる恋人を思い続けるエミコと、大人たちのコミュニティに入りきれないマサコは、それぞれに孤独を抱えている。先述の通り、家族と共に暮らしながら孤立するマサコは理想的な女性像——容姿が麗しく、文化的な嗜みも兼ね備えている——をエミコの中に見出していく。アメリカに

生まれ教育を受けたマサコの日本語能力の欠如、日本文化や習慣に対する未熟な理解は、両親との関係を希薄にする。アメリカ人としてのマサコの価値観は、「モガ」として西洋の文化や嗜みに造詣の深いエミコのそれとより共鳴しうるのだ。このマサコの母娘関係とエミコとの関係性は、ここで再び精神分析的解釈を援用するとより明確になる。村山敏勝は前節に見たフロイトやバトラーの論を基にし、次のように述べる。

…… 主体は喪失したものを自分の内部に取り込み、同一化することで喪失に耐えるのだとすれば、同性に同一化していく主体のジェンダー形成は、まさに同性への欲望の喪失ゆえに起こる。『ジェンダーの同一化は一種のメランコリーであり、禁じられた対象の性が禁止として内在化される』（Butler 1990: 63）。同一化の対象を愛することができない異性愛者は、根源的にメランコリックな喪失の下で生きている。（村山 2022: 76-7）

マサコは母から不注意に対する度重なる叱責と、キヨコの登場により「交換可能な娘」として位置付けられている。母を失望させ、置き換えられる不安を抱えるマサコは母を喪失した対象として抱え込む。母との関係はメランコリックであり、マサコの主体形成はこの喪失の中で揺らいでいるのである。母という近接対象を失った主体であるマサコは、エミコを魅力的で失われた母への同一化の代替回路として接近していく。そこでは同時に抑圧された同性欲望がエミコに投影されているのだが、バトラーの構造に照らすならば、それは倒錯的ではなく主体形成の根本的な動力として再配置されるのである。

戯曲最終幕では、エミコはセージの枝を持って歌いながら登場し、マサコに気づくとその枝を放って歌いつつ去っていく。マサコは枝を拾い上げ、エミコが消えた場所を見つめている。口ずさむ歌詞“Aoi sake nomya / Yume ga odoru. . .”（Yamauchi [1977] 1994: 208）が示唆するように、

日本への帰国や恋人との再会が叶わない辛い現実に対峙できないエミコは酒を飲み夢の中に生き続けることしかできない。瀧田は、一方でマサコがエミコの落とした枝を拾い上げるという「継承」を通して「母が娘から隠そうとした『変わった』女性のセクシュアリティもろとも引き継いでいこうという二世の娘の意思」(瀧田 2002: 42)を見出し、マサコの行為はまさに女性同士の非異性愛的な感情の連続体を象徴していると言える。

ここで二人の間で受け継がれるセージは、伝統的にネイティブ・アメリカンがしばしば「浄化」のために用いていた薬草である。歌詞にある「風に舞い散る花びら」のような、エミコの儚く無念な生涯の最後を語り直すという行為は、成人した今だからこそ可能になった郷愁に満ちたマサコの営みであり、密かに思いを寄せていた女性の魂の浄化を願う鎮魂の一環でもある。「同一化」では、個体が対象に向かった運動を通して対象と一体化していく。結果として同化した者は知らぬ間にいくつかの点で他者のように振る舞う、いわば模倣を行う。同じ枝を手にするという「模倣」を通じて、(ミス・ササガワラ伝説のキクがマリのようになりたいと願ったように) マサコもエミコのようになりたがっているという同一化願望を読み取ることができるのではないか。小説版では、マサコはエミコとの一連のエピソードを今や彼女と同じ年頃になった30年越しに回想しているという設定をとる。両親もオカ夫妻もすでに死去している今でも強烈に印象に残っている彼女のことを思い出すのは、改めて自身の孤独が増したからであろうか。あるいはマサコ自身もエミコのように叶わぬ恋愛を経験したのだろうか。その理由は判然としない。その判然としない様がまさに、メランコリックな様相を呈していると言えよう。

以上を踏まえると、このセージの枝を拾い上げるというマサコの所作は、エミコの生の断念を前提にその「魂」を内在化する象徴的継承の身振りとして読める。短編版でエミコの死が伝えられ、成長したマサコがなおも彼女の記憶に取り憑かれるように回帰する構図は、非血縁的かつ反家父長

的な情動の系譜 (queer lineage) が作動する擬似的な輪廻転生のモチーフとして位置付けられるだろう。すなわち、喪失された対象への同一化が主体の生成を駆動するという精神分析的力学と、レズビアン連続体が示す女性同士の関係の広がりを受け継ぎ、自身の内部にその生の運動を持続させるのである。

かくして「狂女」と烙印を押された周縁的女性の生は、血縁でも婚姻でもないクィアな継承の回路を通して、少女の身体と記憶のうちに生きる。この継承としての象徴的輪廻は、異性愛的再生産に依拠しない未来の想像力を開き、マサコの主体形成が規範の外側で行われる可能性を示している。本作品は、様々な規範により周縁化された女性たちが娘の眼差しによって密かに結び結ぶ連帯と同一化の過程を呈示する。「踊る心 (= 魂)」とは、エミコのそれだけではなく、彼女に魅了され、彼女の人生を抱え込んで生きるマサコの魂でもある。二人の女性の魂が、セージの枝を介して共鳴しながら踊り続けているのである。

IV. おわりに——異性愛規範を超える 日系女性の絆の可能性

本稿で取り上げた二作品では、ともに若い日系二世の少女が語り手として据えられ、「狂っている」と噂される大人の女性を密かに見つめるという構図が反復される。少女たちが抱くその眼差しは、単なる好奇心や恐怖心では捉えきれない一種の「奇妙さ」をはらんでいる。それは恋愛感情や性的欲望として明確に位置付けることもできない曖昧な情動であり、しかしながらその曖昧さにこそ、既存の異性愛規範的な感情カテゴリーから逸脱する可能性を示されているといえる。

リッチが論じた「強制的異性愛」および「レズビアン連続体」という概念に照らしてみると、こうした少女たちの感情は、母娘関係や友情といった非性的な女性同士の関係が有する潜在的な広がりを狭め、異性愛的家族モデルへと感情の回路を

規定しようとする社会的力学に対する小さな抵抗の兆しとして読み解くことが可能である。両作品が執筆・発表された1950、60年代のアメリカは、新ヶ江章友によれば戦後の好景気にありながら保守的な家族価値観を強めていたという。そこでは「一夫一婦制はもちろん当然の家族のあり方と考えられ、夫は外で働き、妻は家族を愛の光で照らすという伝統的なキリスト教的価値観を、人々は体現しようとして」(新ヶ江 2022: 41) いたのである。大量消費社会が生み出した核家族モデルでは国家に従順かつアメリカの伝統を守ることを要求し、反共産主義的、反同性愛的風潮を強めていった。したがって本稿で検討したような、自由な恋愛を求め家族の再生産にも労働にも寄与しない女性は「狂女」というラベリングを免れ得ず、主流社会の標的とされてしまうのである。そして「狂女」に対する少女たちの眼差しは、規範的家族の外側に位置付けられた女性たちの生の可能性を直観的に捉える感受性を提示している。

一方でバトラーが示したように、主体とはすでに失われた同一化を抱え込んだ存在であり、その欲望の形成は社会規範によって可能になると同時に抑圧もされている。少女たちの揺れ動く情動は、まさに異性愛規範の枠内では名指し不可能な喪失の形を帯びており、同一化と欲望のメランコリイ的構造を通して生成する主体のありようを示している。語り手たちが決して自らの欲望の名前を語らないこと、語り得ないことそのものが、規範からの逸脱の可能性を潜在的に保持した主体の生成の場として読めるのである。

白人中心のアメリカ社会からは日系人という点ですでに周縁化されいながら、さらに日系コミュニティ内部でも逸脱者とされる「狂女」と、そこに眼差しを向ける孤独な少女たちは、ある種のはずれ者同士の連帯可能性を映し出している。その意味で両作品は、異性愛規範や家父長制規範をずらし、社会が押し付けようとする「普遍性」に疑問を投げかける豊かな先見性を備えたテクストであると言える。

本稿が明らかにしたように、「狂女」たちは単に

抑圧の結果として排除される存在ではなく、少女たちの主体形成に深く影響を与える存在として機能している。これまでに「狂女」を抑圧構造の暴露や被害者性からの回復として論じてきた研究を踏襲しつつ、本稿では「狂女」に向けられる少女の眼差しや憧憬、理解しきれなさといった感情の層に着目することで、女性同士の関係性が政治的連帯や明示的な同性愛とは異なる形で継承されていく過程を検討した。すなわち、「狂女」表象を血縁や恋愛・婚姻などに依拠しないクィアな情動の系譜を生み出す起点として再定位することを試みたものである。以上を踏まえると、この2作品が共鳴し合うのは単なる文学的主題の類似によるだけではない。日系二世女性として抑圧と周縁化の経験を共有し、さらに作家として友情を育んだヤマウチとヤマモトの二人が、女性同士の眼差しを通して規範の外側にある生の可能性を描き出していた点にこそ、その核心があると言えるだろう。リッチとバトラーの理論を通して読むとき、これら日系アメリカ人女性の文学作品は単に「狂女」表象をめぐる物語という枠を超え、異性愛規範に収斂しない女性同士の関係性が持ちうる解放的な力を探究する先駆的な試みとして改めて浮かび上がるのである。

謝辞

本稿はJSPS科学研究費基金・若手研究(課題番号25K16223「日系英語文学におけるクィア表象とエスニシティの交差」)の助成を受けている。また本論文に大変の確かかつ貴重なご助言をいただいた査読者の皆様に厚く御礼申し上げる。

付記

本稿は2024年11月9日にオンラインで開催されたアジア系アメリカ文学会第155回例会(Wakako Yamauchi生誕100周年記念ミニシンポジウム——Wakako Yamauchi作品の文学的水脈をたどる)での口頭発表「二世少女を惹きつける‘Mad’な女性たち——Hisaye YamamotoとWakako Yamauchiの比較」の原稿に大幅な加筆・修正を施

したものである。

注

- 1 第二次世界大戦中、主に西海岸地域に居住した12万人にも及ぶ日系アメリカ人が「敵性外国人」として、国内に10ヶ所設置された「戦時転住所」たる強制収容所をはじめとする施設に収容された (*Rafu Shimpo* 2022年10月1日の記事に詳しい)。
- 2 ヤマモトとヤマウチは強制収容所から解放されたのち、ロサンゼルスにて一時期共同生活を営んでもいた (*Hongo*, 1994: 3)。両者の創作スタンスの違いについては稲木妙子 (2003: 190-207)、マクドナルドとニューマン (1980: 23) にも詳しい。
- 3 他に *Elaine Kim* (1982: 253-5)、*Yogi Stan* (1992)、*Esther Ghymn* (1995) らの批評においてもこれら「狂女」が考察されている。
- 4 マリは戦前にバレリーナとして国中を巡って活躍していた。エミコは箏の名取りの腕前を有し、他にもさまざまな文化的嗜みを身につけていた。
- 5 収容所は有刺鉄線に囲まれ、銃を持つ白人看守が常に監視塔から見張っていた。日系人たちは一棟のバラック内に複数家族が鮎詰めで暮らし、トイレや浴場には仕切りがなかったという (*Matsumoto* 1993)。
- 6 本作における信頼できない語り手については、キンコック・チャン (*King-Kok Cheung* 1993=2015:102)、マクドナルドとニューマン (1980: 27) を参照のこと。
- 7 1943年2月には収容所内で忠誠登録が実施された。①アメリカ軍への従軍の意思と②アメリカへの忠誠の意思及び天皇への忠誠放棄、を問い、どちらにも「はい」と回答した者には東部、中西部での進学や就職の道が開かれる場合があった (*Denshō* に詳しい)。
- 8 リッチのこの概念に対しては、女性間の連帯を拡張する以前に男女二元論的制度の克服・廃止を目指したモニク・ウィティッグ (*Monique Wittig* 1992) や、レズビアンが脱性化されることでその特異性やアイデンティティの希薄化を危惧したテレサ・デ・ラウレティス (*Teresa de Lauretis* 1994: 190-8) らの批判を受けた。
- 9 リッチはメリデル・ル・スール (*Meridel Le Sueur*) の『少女』 (*The Girl*, 1978) やトニ・モリスン (*Toni Morrison*) の『スーラ』 (*Sula*, 1973) といった文

学作品における女性同士の関係性の中にもこのような「レズビアン連続体」の可能性を見出している。

- 10 キクがこの詩を発見したのが、収容所を出てマリと別離した後のことであった点は重要である。収容所という特異空間から時間的・心理的距離を経た後でも、マリとの関係は終結することなく、キクの内面にマリ自身の思いや彼女への関心が沈殿し、再び立ち上がる可能性が示唆されるからである。
- 11 母娘関係を中心に描く代表作“*Seventeen Syllables*” (1949) や“*Yoneko's Earthquake*” (1951) と異なり、本作品では父娘関係が問題になっている。収容所内において両者はそれぞれ非社会的な態度を見せるが、彼らに対するコミュニティの反応は異なる。それがジェンダーの違いによるものであるとチャンは指摘している (*Cheung* 1993=2015: 97)。
- 12 ヤマモトはマリのモデルとなった女性と、その人物が詩人であるとは知らずに収容所で出会っていた。その女性はその後58歳の時、介護施設にて死亡したらしい。またヤマモト自身、マリが正気でないとは考えていなかったと述べている (*Crow* 1987: 79-81)。
- 13 本作品は次の二つの日系家族の交流を中心に展開する。①ムラタ家 (移民一世の父ムラタと母ハナ、アメリカ生まれの娘マサコ) と、②オカ家 (同じく一世の夫オカと妻エミコ、オカが日本でもうけた娘キヨコ)。

参考文献

- 新井透, 2004, 「セクシュアリティと狂気——ミス・ササガワと強制収容所」『名古屋市立大学 人文社会学部研究紀要』 (名古屋市立大学人文社会学部) 第17号: pp. 201-13.
- Butler, Judith, 2000, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity. Tenth Anniversary Edition*, New York, Routledge. (竹村和子訳, 2018, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱 新装版』 青土社).
- Cheung, King-Kok, 1993, *Articulate Silences: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston and Joy Kogawa*, Ithaca and London, Cornell UP. (和泉邦子・小松恭代・中根久代訳, 2015, 『アジア系女性作家論——沈黙の声を聴く』 彩流社).
- . ed. 2000, *Words Matter: Conversations with*

- Asian American Writers*, Honolulu, U of Hawaii P.
- Crow, Charles L. and Hisaye Yamamoto, 1987, "A MELUS Interview: Hisaye Yamamoto", *MELUS*, 14(1): pp. 73-83.
- de Lauretis, Teresa., 1994, *The practice of love: Lesbian sexuality and perverse desire*, Bloomington, Indiana UP.
- Freud, Sigmund, "Trauer und Melancholie", *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse*, 4(6): pp. 288-301. (十川幸司訳, 2018, 「喪とメランコリー」『メタサイコロジエ論』(講談社) 楽天Kobo).
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. 1979, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-century Literary Imagination*, New Haven and London, Yale UP.
- Ghymn, Esther Mikyung, 1995, *Images of Asian American Women by Asian American Women Writers*, New York, Peter Lang.
- 桼原美恵, 1997, 「Wakako Yamauchi (ワカコ・ヤマウチ)」植木照代、ゲイル・K・佐藤他著『日系アメリカ文学——三世代の軌跡を読む』創元社.
- Hongo, Garrett, 1994 "Introduction", In Garrett Hongo ed., *Songs My Mother Taught Me: Stories, Plays, and Memoir*, New York, The Feminist P at the City U of New York.
- 稲木妙子, 2003, 「境界への眼差し——ヒサエ・ヤマモトとワカコ・ヤマウチ」英米文化学会編『行動するフェミニズム——アメリカの女性作家と作品』新水社.
- Kim, Elaine H, 1982, *Asian American Literature: An Introduction to the Writings and Their Social Context*, Philadelphia, Temple UP.
- Matsumoto, Valerie, 1984, Japanese American Women during World War II. *Frontiers: A Journal of Women Studies*, 8(1): pp. 6-14, (2026年3月9日取得, <https://doi.org/10.2307/3346082>)
- McDonald, Dorothy Ritsuko and Newman Katharine, 1980, "Relocation and Dislocation: The Writings of Hisaye Yamamoto and Wakako Yamauchi", *MELUS*, 7(3): pp. 21-38.
- 前島志保, 2001, 「日系社会を超えて——'And the Soul Shall Dance'の短編と戯曲」『比較文学文化論集』(東京大学比較文学・文化研究会) 第18号: pp. 101-14.
- 向井雅明, 2016, 『ラカン入門』筑摩書房.
- 村山敏勝, 2022, 『(見えない)欲望へ向けて——クィア批評との対話』筑摩書房.
- 元山千歳, 2001, 「ホモセクシュアリティ——民族の性への揺さぶり」アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学——記憶と創造』大阪教育図書.
- Rafu Shimpō: Los Angeles Japanese Daily News, 2022, "75 WWII Camps Listed on Ireichō", Rafu Shimpō, (2026年3月9日取得, https://rafu.com/2022/10/75-wwii-camps-listed-on-ireicho/?utm_source=chatgpt.com)
- Rich, Adrienne, 1986, "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence", *Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose 1979-1985*, New York, W.W. Norton & Company, Inc. (大島かおり訳, 2025, 「強制的異性愛とレズビアン存在」『新版 血、パン、詩。』晶文社).
- 新ヶ江章友, 2022, 『クィア・アクティビズム——はじめて学ぶ〈クィア・スタディーズ〉のために』花伝社.
- 瀧田佳子, 2002, 「こころは踊る——アジア系アメリカ文学と狂気」『アメリカ太平洋研究』(東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター) 第2号: pp. 35-44.
- Wong, Sau-ling C., and Jeffrey J. Santa Ana, 1999 "Gender and Sexuality in Asian American Literature", *Signs*, 25(1): pp. 171-226.
- "WWII Incarceration: Part Four", Denshō, (2026年3月9日取得, <https://densho.org/learn/introduction/responses/>)
- Wittig, Monique, 1992, *The Straight Mind and Other Essays*, Boston, Beacon P.
- Yamamoto, Hisaye, 2001, *Seventeen Syllables and Other Stories: Revised and Expanded Edition*, New Brunswick, New Jersey, and London, Rutgers UP.
- Yogi, Stan, 1992, "Revels and Heroines: Subversive Narrative in the Stories of Wakako Yamauchi and Hisaye Yamamoto", In Shirley Geok-lin Lim and Amy Ling eds., *Reading the Literatures of Asian America*, Philadelphia, Temple UP.
- Yamauchi, Wakako, 1994, *Songs My Mother Taught Me: Stories, Plays, and Memoir*, New York, The Feminist P at the City U of New York.

Abstract

Queer Resonances with “Mad Women”: Nikkei Girls’ Affective Attachments in Hisaye Yamamoto’s “The Legend of Miss Sasagawara” and Wakako Yamauchi’s “And the Soul Shall Dance”

Takuma Furukawa*

This paper examines Japanese American writers Hisaye Yamamoto’s “The Legend of Miss Sasagawara” (1950) and Wakako Yamauchi’s “And the Soul Shall Dance,” (1977) focusing on the relationships between Japanese American Nisei (=second generation) girls and adult women labeled as “madwomen.” In both works, women who deviate from the norms of the Japanese American community are stigmatized as insane, while young female narrators are drawn to them with admiration, curiosity, and sympathy. This paper analyzes these relationships through Adrienne Rich’s concept of the lesbian continuum, as well as Judith Butler’s theory of melancholic gender. It argues that the girls’ ambiguous emotions, though not consciously recognized as sexual desire, reveal queer sensibilities that resonate with the women’s resistance to patriarchal and heteronormative expectations. Furthermore, the paper reconsiders the figure of the “madwoman” not merely as a victim of oppression, but as a site through which queer female affect, identification, and intergenerational solidarity are inherited. Through this analysis, the study illuminates alternative possibilities for female subjectivity and relationships within Japanese American literature.

Keywords: Japanese American Literature, Hisaye Yamamoto, Wakako Yamauchi, lesbian continuum, melancholic gender

* Instructor, Otemae University